

福生地域の生活と文化

— 食・住・通過儀礼 —

河上一雄

はじめに

市史編さんの初年度にあたって、民俗部門では他と同じように事業計画の立案とそれにとまなう調査員の人選がおこなわれた。まず、事業計画の立案において、市史編さん事業発足以前における民俗の成果がどうかの検討をおこなった。幸いなことに、当市では教育委員会の社会教育課を主管として、かなり程度の高い民俗調査及び調査報告がなされており、この成果を踏台として補充して行く計画が立案された。五九・六〇年度は主として「衣食住」・「年中行事」・「通過儀礼」の調査を市内全域でインテンシブ（集中的）におこなうとの計画である。

次いで、調査員についてであるが、これも社会教育事業のなかで市民中心に成長してきた「地域の生活と文化を考える会」グループ・ゆずりは」の人々をメンバーとするこ

とになった。というのも、このグループは数年にわたって、市の社会教育事業の婦人セミナーで民俗調査の方法と地域の生活文化のもつ意味を学習し、その上に調査の実践さらには調査報告書を刊行しているからである。地元の人が大部分を占めており、いつでも調査に出られ、かつ地域の生活者としての目をもって調査ができるメリットをもっている。近年の市民参加の市史編さんの動向ともあいまって、本当の市民のための市史づくりが出来ることを期待していることでもある。メンバーを紹介しておく、紫令子・山崎ヨシ江・橋本増・横地美枝子・森田節子・木下直子・保坂和子・浅井薫・牛房富士子の諸氏と、他に指導の立場から日本民俗学会会員の増田昭子・佐野和子の二氏にも参加してもらっている。このような調査員構成で、河上一雄を責任者として民俗部門は活動を開始したが、どのような調査

一 食生活

が行なわれたか、内容を含めてその概要を報告してみよう。

福生市内における明治後期から、経済の高度成長が始まるぐらいまでの間の食生活はどうであったろうか。食生活といっても、主食・副食物のあり方、調理法や食器、ならびに調味料、ハレの日の食品といったように多方面にわたる。さらには、季節によって、生業によってといったように、食生活は異なってくるし、暮し向きによっても差異がある。かなり、調査上困難な点はあるが、市民の方々が心よく調査に協力していただき、貴重な資料を得ることができた。

まず、食生活の前提となる生業についてみると、昭和二〇年代ぐらいまでは、畑作中心の農業が主たる生業であった。そして、現金収入の大部分は養蚕によっていたと考えられる。ごく一部をのぞいては、水田はなく、畑で桑・陸稲・麦（大・小麦）が中心に栽培されていた。このため、主食もおのずから田米ではなく、オカボ・麦が中心である。飯における米麦の比率をみると、米三分に麦七分の麦飯で、田場所にくらべると麦の混合率が格段に高いといえる。使用される麦も、ヒキワリからオシムギに変化していったが、オシムギの方がずっとうまかったという。

このほか主食におきかわるものとして、サツマダンゴ・

エゴイモがある。サツマダンゴは、サツマイモを切って干し粉にしたものを、練ってむしあげたもので、養蚕の繁忙時によく食べられた。エゴイモは、形状はサトイモに似ているが、いささか細長く縞の模様があり、エゴイ（ヨゴイ）のが特色である。これも主食代りに朝食によく食べられ、エゴさを抜くのが肝要であった。このため、前の晩より何回も煮ておく必要があったが、サトイモに比べて収量が多いため、広く栽培されたものである。このほか、バクメシといって大根を細く長く切り、麦を水に浸しておいたところに入れて炊くもので、いささかぬめっこいものであった。また、キビ・アワメシもみられた。

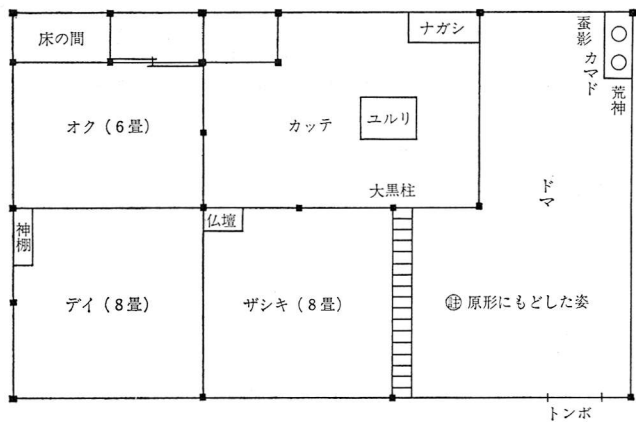
ハレの日の食品の主役は、モチとソバ・ウドンである。モチのために、田米を買うこともあったが、アワモチが中心であった。

副食物は、季節ごとの野菜が使用されたが、養蚕時にはカマスに入ったマスを食べたり、冬になればご馳走としてケンチン汁があり、これは今日にも伝承されてきている。ミソ・シヨウウユは自家製で、ことにシヨウウユは業者に絞りにきてもらったことも多い。

二 住いと生活

福生市内では、急激な都市化のなかで、古い伝統を伝える民家はほとんどみられなくなってしまっている。現在の

調査時点においては、天保一二年（一八四一）頃と考えられる民家があるが、それを中心にして報告しておこう。この家を仮りにA家と称することにしているが、A家の家屋も何回にもわたる増改築をしているが、それでも母屋の本体は基本的に変わっていない。基本的に変わった部分は、屋根で、昭和三七年にカヤヤネからカワラブリキに改修された。母屋



の形態は、右勝手
の田の字型のもので、八畳と六畳とを間取りの基本とし、建築材にはケヤキが多く使用されている。トシボグチから入ってすぐ左手の部屋をザシキ、その奥をデイと称し、デイの隣りの部屋はオク、ザシキの横はカッテである。オクとカッテとの間に

ナンドという部屋のあった民家もみられる。A家では、仏壇はザシキに置かれ、神棚はデイに、床の間はオクにあり、各部屋の使い方は、人よせの行事（婚礼・葬式）にはザシキ・デイが使用され、養蚕時にはザシキのタタミをあげる。オクは寝室であり、また出産時に使用され、カッテは食事の場でイロリ（ユルリ）が切つてある。母屋の土間に付属してハタヤがついており、ここで機織りがおこなわれた。カッテとドマのカマドの近くには、荒神と蚤影ひよこかげさんが祀られ、さらにカッテには大黒も祀られている。屋根裏は養蚕に使用され、もと天井はなく竹の子であり、一部が現在にも残っている。このほか、養蚕のためにザシキには細長いイロリが切られてもいた。屋敷地には、井戸・風呂・セツチン・作業小屋が設けられ、また養蚕のために裏の石垣にはクワムロと呼ばれるムロが設けられていた。屋敷地の周囲には茶の木を植え、自家用に供するのが通常であったという。

三 通過儀礼

通過儀礼は、人生の折り目ごとにおこなわれる儀礼をさす。基本的には西多摩地方でおこなわれるものと大差ないといつてよいであろう。いくつか特色ある伝承を紹介しておこう。

出産にあたっては、婚家先きで産むのが通例で、婚家のオクの部屋で出産をする。出産にあたって、かなり古くはトリアゲバアサン、明治末年からオサンバサンそして病院といった変遷がみられる。また、安産祈願のために尾崎の観音さまに行くことが多かった。宮参りは、伝承にずれがみられるが、男児が女兒より二日早く、男児は三〇日目に女兒は三二日目ぐらいで、姑が赤児をつれてオボスナサマに、赤飯をもって行く。また、カキモノといって、赤児の頭にオムツをかぶせて、セツチン・大神宮・倉などにも詣るものであった。子供がやがて成長して行くなかで、七才の時にオビトキ、今でいう七五三の行事がおこなわれる。

結婚についてふれてみると次のようである。昔は多く親同士が結婚の約束を決めたが、まずシタバナシがおこなわれる。このシタバナシをする人をハシカケと呼ぶ。シタバナシがうまく行くと、オセワニンをたててのタルイレとなり、ついで婚礼となる。婚礼の当日、まず掣と掣方のオセワニン、シンセキ代表・近所の代表が五ないし七人という奇数の人数で嫁方へ行く。そこで、嫁方との親類名のりや三々九度がおこなわれ、これがすむと掣方は帰る。当日の夕方、いよゝゝ嫁入りとなる。嫁方は、嫁・嫁方のオセワニン、シンセキ・近所の代表などが人数をすこし増して行くが、嫁の近くにはツレヨメ・ソイヨメといって、若い娘が嫁と同じような姿でつれそう。行列をくんで行く途中に

掣方よりムカエザケといって酒一升をもって迎えにくる。嫁は、掣方のオセワニンの家（中宿ともいう）で着替えた後一休みをとる。そこから、嫁は掣方の家に向うが、掣方の家のトンボグチではワラで火をたいていぶしてあり、それをまたいで家に入る。それから、祝言となり宴会となる。祝言は、アイサカズキ（三々九度）・オヤコサカズキ・キヨウダイサカズキがおこなわれ、宴会は本膳が出されるが、最後に嫁のオチャとウドンが出されて終りとなる。三日目にミツメの里帰りが行なわれ、嫁は嫁入り姿で帰り、クミアイや近所に紙一帖をもってまわる。なお、タルイレにあたって、とりかわされる品物を、明治三〇年のある家の例を紹介しておこう。

目録

- 一、家内喜多留 二
- 一、寿留女 二
- 一、子産婦 二
- 一、丈長 二
- 一、末広 二
- 一、志良賀 二
- 一、袴代 金三円

右之通幾久敷目出度御受納

可被下候 以上

もう一つは、時期がすこし遅くなるが、養子の場合のも

のであるのをあげておこう。

目録

- 一、家内喜多留 壹荷
 - 一、勝男武士 壹台
 - 一、寿留女 壹台
 - 一、子産婦 壹台
 - 一、志良賀 壹台
 - 一、帯代 金五拾円
 - 一、末広 一対
- 右目録之通り幾久敷目出度
御受納仕り候 以上

おわりに

五九年度の民俗調査の一端をここに紹介したが、このほかにも多くの貴重な伝承を得ることができた。調査員諸氏の努力はいうにおよばず、市民の方々のあたたかいご協力があったればこそのものである。まだ、市史編さんの事業における民俗調査はその緒についたばかりであり、これから一層の市民の方々のご協力を期待したいものである。六〇年度においては、市内全域において民俗調査の実施を考えており、貴重な伝承や資料をお寄せいただけたらと願っていますし、またこんな話しを知っているというような情報を市史編さん事務局にどんどんお寄せ下さい。

さて、民俗調査は市内を中心とはするが、この多摩地方のなかで福生の民俗がどのような位置を占めるのかといった面も考えて行きたいと考えている。また、今後の福生の市民がどのような民俗、といっても地域の生活文化を築いて行くのかの一助にもなればとの視点をもって市史編さんの民俗部門の事業に取り組んで行く考えである。

市史編集専門委員の横顔

「民俗」担当

昭和一六年東京都生れ

武蔵野市在住

東京教育大学・同大学院修了

東京都立富士高校教諭、全国歴史教育研究協議会常任理事、足立区・福生市文化財保護審議委員など。

〈編著書〉『社会科学のための民俗学』、『日本民俗学講座・2』、『講座・日本の民俗・総論』、『講座・日本の民俗宗教4』、『関東地方の火の民俗』など。



かわかみ 一雄
河上 一雄